momo

黒猫林檎。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｍｏｍｏ

【Ｎコード】
Ｎ７７０９Ｏ

【作者名】
黒猫林檎。

【あらすじ】
１１月１１日

君は私に大切な何かをくれました。

平凡な家の小さな小さな物語。

メルヘンチックだけれど、すこしシビアなお話。

＊ノンフィクションを元にしたフィクションです。

1

さっき、私は死にました。
家の中の陽のあたる場所、誰も居ないリビングで死にました。

ある日、お腹に何かできました。お母さんとお姉ちゃんが、病院につれていってくれました。お姉ちゃんといっても、人より歳をとるのが早い私にとって、今は歳下です。これからは、まーちゃん、と呼ぶことにします。

お医者さんは言いました。
「何らかの腫瘍です。検査しないと悪性かどうかわかりませんが、切実することをおすすめします」

そのお医者さんの表情は、少し長い前髪で見えませんでした。お母さんとまーちゃんは心配そうに眉をひそめています。

お医者さんの言っていることはわかりません。でも、病気になったことはわかりました。

家に帰って、お母さんがお父さんと何か話していました。私は窓の外からそれを見ていたので、何を話しているのかよくわかりません。ずっとそちらを見ていると、突然お父さんが私のところへやってきました。
「明後日、手術を受けような」

そう言って、頭をぽんぽんと撫でました。

私は、アサッテ、にシュジュツヲウケル、ことが決まったみたいです。何なのかよくわからないけれど、お父さんが優しく撫でてくれていたので、喜んでいました。

夏のはじめで青々と茂っている木や草を見て、明日はお庭で遊べるかな、なんてことを考えながら、眠りにつきました。

2

ある日、まーちゃんが学校に行って、お父さんが仕事に行ったあと、お母さんがまた病院につれていってくれました。アサッテ、になったんだなぁ、と思いました。

この前のお医者さんに会って、その人がチクっ、と何か私にしました。だんだん眠くなってきます。

気づくと、夕方になっていました。お腹にあった何か、がなくなっています。少し経つと、小さな窓から薄曇りの夜空が見えました。

月には雲がかかり、星はぼうっ、と輝いています。それらを目に映すと、すうっ、と眠りについてしまいました。

3

誰かの話し声で目が覚めました。

昨日星が見えた小さな窓から、朝の光が帯をつくってこっちを照らしています。辺りを見回すと、そこは私が全然知らない場所でした。遠くでお母さんとお医者さんの話し声が聞こえます。それがしなくなると、今度は足音がします。それはこちらにむかってきます。そちらを見てみると、お母さんとお医者さんが歩いてきていました。私の前でまた暫く、お母さんたちが話をして、それから、私を家につれて帰ってくれました。

4

毛皮のある私たちにとって暑い夏が終わって、少し経ちました。
まだ昼間は暑いけれど、夜はだいぶ涼しくなっています。
あの病院に行った日から、私は元気に過ごしていました。
お庭では、夜には虫たちの大合唱が聴こえてきます。

少し落ち葉が増えてきたある朝、突然、動けなくなりました。ご飯を持ってきたお父さんに近づくことさえできません。お父さんはそれに気がつき、動けない私を家の中につれて入りました。家の中にいたお母さんも私の様子を見て驚いていました。その日のうちに、私はまたあの病院につれていかれました。
お医者さんは眉間にしわを寄せて、前髪を手でばさばさとしました。
「この前のお腹の腫瘍が悪性で、足が脳、神経に転移している可能性があります。もしくは、寄生虫が脳に入っている可能性も・・・・・・。ですが、詳しくはわかりません」
それから家に帰って、私は小屋には入れられずに、リビングに寝かせられました。ダンボールとタオルを敷いた上は、あまり寝心地がよくありません。そこの近くには大きな窓があって、そこからは風に揺られて葉を落とす木々が見えました。
お日さまが一番高くに昇ったころ、まーちゃんが学校から帰ってきました。私を見るなりきょとん、として、
「どうしたの？」
とお母さんに聞いていました。
お母さんが全部の事情を話して終わると、
「大丈夫ー？」
と近くに寄ってきて、頭を撫でてくれました。
大丈夫だよ、と言いながらまーちゃんを見上げます。

そして、お母さんたちはどこかへ出かけていきました。
足が少し痛んだので、お母さんたちが帰ってくるまで寝て過ごしました。帰ってきたまーちゃんたちは、ふかふかのソファーみたいなものを買ってきていました。
私をその上に寝かせて、
「あ、小さかったね」
「こんなに大きかったっけ？」
二人同時に言いました。
確かに少し窮屈でした。お母さんが何か持ってきて、それから後ろのほうでちくちく、と音がしました。それが終わると、ソファーが少し広くなります。それから広くなったそれの上で窓の外を眺めました。
空がだんだんと暗くなって、茜色が広がり、そして、濃い紫色になりました。
お父さんが帰ってきました。
「床ずれができそうだね」
と私を見ながら言います。
それを聞いていたまーちゃんは、ぱたぱたと二階に上がっていって、がたがた、と何か音をたてて、暫くして戻ってきました。
「クッションできたよー」
そう言ってクッションを私の下に敷いてくれました。二階でまーちゃんはこれをつくっていたのでしょうか？　ありがとう、と言いたいけれど、私は犬みたいに尻尾をふれないし、猫みたいに喉を鳴らすこともできません。
それを伝えられないことが、一番嫌でした。
お母さんたちがご飯を食べ終わったあと、私にお水をくれました。それはすごく苦くて、吐き出しそうになりました。くすり、というものらしく、その後に普通のお水と、私の大好きなさつまいもをくれました。
また何日か経ちました。お庭の色がだいぶ茶色っぽくなってきて

います。私は堅いものが食べられなくなりました。それどころか全身に力が入りません。当然、今まで食べていたご飯が食べられなくなって、お芋も食べられなくなりました。食欲もあまりありません。お母さんたちはそんな私を見て、美味しそうな匂いのする、どろどろとした緑色のものを食べさせてくれるようになりました。ご飯が食べられなくなってから、だんだんと私の体は弱っていきました。それが自分でもわかります。

することもなくなった私は、頭だけ少し動かして、いつも、私が小さい頃遊んでいたお庭を眺めるようになりました。いつの間にかそれが日課にもなりました。お庭を眺めながら、小さい頃のことを思い返します。

私は、草がいっぱい茂って、土のあるそこが大好きでした。お母さんたちがたまにそこで遊ばせてくれていて、それをいつも楽しみにしていました。でも、一回だけそのお庭で、怖い思いをしたことがありました。私がお庭で遊んでいると、近くを通りかかった黒と白のぶちの模様の猫に追いかけられたのです。あの時のことは、ほんとうによく覚えています。私は全速力で逃げました。お庭のあちらこちらを走り回りました。きっとあの時が一番速く走れたと思います。必死で逃げ回っていると、まーちゃんが猫に気づきました。私と猫の間に入って、追い払ってくれました。その後、ふるえている私を抱きしめてくれました。

その時のその猫は、私が動けなくなってから、何回か、私のいる窓辺にやってきました。窓越しに、にゃぁ、と話しかけてくれます。猫は、また遊ぼうよ、と言っていましたが、私は、ごめんね、とだけ伝えました。前に遊んだ、私はそうは思っていなかった、その猫は、寂しそうに帰っていきます。黒と白の背中がどんどん離れていって、そして、見えなくなりました。

私は、いくらがんばってももう走れません。歩くことや動くことすらできません。いつかまた、動けるようになったらいいな、なんて、いつも思うのでした。

夕方になると、みんな帰ってきます。部屋の中が明るくなるから、この時間が一番好きでした。もう少し時間が経つと、みんな「おやすみ」と言って、二階に上がっていきます。
たいてい最後まで一階に残っているのはまーちゃんでした。そして二階に行ってしまう前に、いつも色んな話をしてくれます。学校のこと、友達のこと、男の子のこと、いろんなことを教えてくれます。面白い話だったり、愚痴だったり、そんな時間も大好きでした。
「こんなこて言うのもなんだけど、次の春までは生きてなよ。私が卒業するの見ててよ
。てか、桃の花が咲くのをまた一緒に見ようね」
ある日の夜、まーちゃんは突然こう言いました。
私がこの家に来たのは、まだちょっと寒い春のことでした。たくさんの仲間のいるおじいちゃんの家で生まれて、そこのお姉さんが私を車に乗せて、この家につれてきました。そのときはまだ、まーちゃんがお姉ちゃんでした。車から降ろされるとき、お庭が見えました。そこには背が高くて、だけど細い木が可愛い桃色の花をちょこっとだけ咲かせてるのが見えました。まーちゃんは私を抱っこして、
「これが桃の花だよ。ももの名前と一緒。まぁ、本当は桃の節句の前の日にうちに来たからなんだけどね」
そう言って笑って、その木の前で話してくれました。
来年、その花が咲くと、また一緒に見ようね。その日、まーちゃんはそんなことを私に言ったけれど、それをしてあげることは私にはできませんでした。

5

昨日も、綺麗な細い月がお庭を少し照らす頃に、まーちゃんは話をしてくれました。最初は音楽を聴きながら撫でてくれていました。けれど、ふと、まーちゃんはイヤホンを外して持っていたケータイで写真をとりました。何かを感じたのでしょうか、二階に上がっていくときも、電気を消す前にドアの前でずっとこっちを見ていました。

「死んじゃだめだからね。おやすみ」

そう言って電気を消して、ドアをぱたん、と閉めました。少しの間、ドアの向こう側に立ち止まっている気配がして、そして、二階に上がっていく音がしました。その音も聞こえなくなったとき、私は、約束守れないみたい、ごめんね。

そう呟きました。

虫たちも寝静まったお庭を見ながら、目を閉じました。

太陽が昇って、少し朝日が差し込んできた頃、私はうっすらと目を開けました。もう息をするのも苦しくて、みんなが学校や仕事に行くのを見送ってからまた、眠りにつきました。

次に目を開けると、太陽がだいぶ昇って、お庭の植物が嬉しそうに伸びをしていました。ぼうっ、とそれを見ているとお父さんとお母さんが昼ご飯を食べに帰ってきました。うっすらとした意識のなかで、私を撫でてくれているのがわかります。優しい手だなぁ、と思いながら、お水を少し飲みました。暫くすると、お母さんたちはまた仕事に出かけて、また一人になりました。なんだかどんどん意識が薄れていきます。お庭を見ると、桃の木、が寂しげに立っていました。葉っぱも、花も、ついていません。もうそれさえも見るのがやっとです。

そして、

私の心臓は、

脈打つのをやめました。

6

外ではだいぶ冷たい風が吹いています。昼間は伸びをしていたお庭の草たちも、もうそろそろ寝る準備に入りました。もうすぐお日さまが沈みます。長い長い、夜の始まりです。陽のさしていた、私の寝ていたところもだんだんと陰になっていきます。薄暗い家の中を、自由に動くようになった足で駆け回ってみました。本当は、お庭にも出たかったけれど、お父さんたちが帰ってくるのを待つことにします。お母さんは、さっき洗濯物を家の中に入れに帰ってきました。

「ももちゃん」

そう呼ばれているけれど、私の体は反応することができません。代わりに、また仕事に出かけていくお母さんの姿を、玄関まで見送りに行きました。声をかけても反応しなかった私に、お母さんはずっと心配そうな顔をしていました。

お日さまが地平線に隠れて、いよいよ暗くなってきた頃、今度はまーちゃんが心配そうな顔で帰ってきました。

「ただいまー。生きてる、よね？」

そう言って、ソファーに荷物をえろして、わたし、のほうへ近づいてきます。暫く声をかけたり、触ったりして、そして、誰かに電話をかけました。きっとお母さんでしょう。受話器をおろすと、まーちゃんは、ぽたっ、ぽたっ、と目から涙を流しました。それは止まることを知らずにどんどん増えていきます。わたし、にもそれは降ってきます。まーちゃんは、まだ少し暖かい、わたし、を持ち上げて、わたしのおでこと自分のおでこをくっつけました。それは昔、まーちゃんが私によくやってくれていた仕草です。私はそれが大好きでした。その仕草をしながら、まーちゃんはもっと沢山の涙を流しました。わたし、の顔の毛皮を濡らしていきます。隣でそれを見ていた私は、感じるはずがないのに、涙で濡れた部分が暖かいよう

な、冷たいような、そんなふうに感じられました。まーちゃんはずっと泣いていました。暫くしてまーちゃんは、すくっ、て立ち上がって洗面所に行きました。顔を洗ってきたその顔には、もう涙はありませんでした。ただ、必死に堪えているのがわかります。まーちゃんはそれから、ソファーに座ってお父さんの帰りを待っていました。

しん、と静かな家の中に、ガチャッ、という玄関の開く音がしました。バタン、とドアの閉じる音とともに、お父さんが部屋へ入ってきます。鞄を置いて、わたし、を撫でました。まーちゃんが事実を告げて、それでやっとお父さんは私が抜け殻になっているに気づきました。

「親父と同じ命日だ」

ぼそっ、とそんなことを呟いています。お母さんが帰ってきてから、お父さんは家の外から崩してあるダンボールを持ってきました。まーちゃんとお父さんがそれを組み立てます。中に私が使っていたタオルを敷いて、その中に、わたし、をまーちゃんが入れました。お母さんはずっと台所で隠れて泣いていました。まーちゃんもお父さんもそれに気づいてはいたけれど、何も言いません。わたし、の周りにはお花やクッションなどたくさんのものが入っています。すべて入れ終わったら最後に、箱の前に線香を三つ立てました。

お父さんとお母さんが寝た後、今日も一階に最後まで残っていたのはまーちゃんでした。今日は、まーちゃんは何も話しません。ただただ冷たくなった、わたし、の頭を撫でています。そして立ち上がって、電気を消す前にドアの前で一度振り返って、

「おやすみ」

そう言いました。わたし、は一階にあるけれど、その日私は一緒に二階に上がってまーちゃんのお布団の上で寝ました。

7

またお日さまが昇って、お庭ではいつもと同じ朝が始まりました。みんなが起きると、お父さんは桃の木の下に、わたし、の箱を埋めました。そしてみんな、それぞれ仕事や学校に行きます。みんなが家から居なくなった後、私は思いっきりお庭を駆け回って、遊び回りました。冷たい風が気持ちよくて一生懸命走りました。とても速く、走ることができました。それから、落ち葉の上に横になりました。お庭の景色をこんなに近くで見るのは久しぶりでした。ふと空を見ると、うろこの形の雲がゆっくりと流れています。その雲の行き先を目で追ってみると、一本の木が目に留まりました。

8

それから暫く、まーちゃん、は寝る前に私の居た窓辺を何度も振り返っていました。お母さんは、さつまいもの料理を作る度に悲しそうな顔をしていました。お父さんは、お庭を見てずっと桃の木を眺めていました。そういう時、私はいつもまーちゃんやお母さんやお父さんの隣にいました。でも、みんなに私は見えません。私の気持ちも伝わりません。育ててくれてありがとう。一緒にいてくれてありがとう。美味しいご飯をありがとう。いつも遊んでくれてありがとう。・・・・・悲しんでくれてありがとう。全部伝えたいのに、全部伝えられません。私はみんなの隣っただずっと悲しそうな顔を見ているしかありません。どうにか、みんなに伝えたい。いろいろ考えで、そして、いい方法を一つだけ思いつきました。

その頃、まーちゃんたちの周りはいろいろ変わっていました。私がいたソファーには、白い長い毛の猫のぬいぐるみが座っています。私がいた小屋には、むぎくん、と呼ばれる男の子がいます。あれからずっと悲しい顔をしていたまーちゃんたちにも少しずつ笑顔が戻ってきました。私のこと忘れちゃったのかな？なんて、少し思ったけれど、むぎくん、を、ももちゃん、と呼ぶところを見ると、そんなこともないな、と思います。

9

いつの間にか季節は冬になりました。寒い寒い冬の朝。お庭に吹く風は刺すように冷たくて、土には霜柱が立っていました。その上をさくさくと歩いていきます。足の裏がとても冷たくて、凍ってしまいそうなくらいでした。それでも、ありがとうを伝えるための計画を実行するために、がんばって準備をします。最初は霜柱で少し遊んでいたけれど、さすがに冷たさに耐えられなくなって走っていると、

「今、何か白いの通ったよね？」

「通った。ももっぽいね」

「まさかね」

そんな声が窓から聞こえました。それはまーちゃんとお母さんでした。私が見えたのでしょうか？不思議そうな顔で家の中に戻っていきました。

それを見ている間、ちょっと立ち止まっていたおかげで、足の裏がまた凍るように冷たくなってしまいました。お母さんたちがいた窓を見て、また準備に取りかかりました。年が明けて、とても寒い時期も過ぎました。最近はお日さまが出ている時間は暖かくて、眠っていたお庭の生き物たちが少しずつ起き出し始めました。

桃の花が、ひとつ、咲きました。

いよいよ計画を実行する日が近づいてきます。ありがとう、を伝えるまであと少しです。

だいぶ暖かくなってきました。どんどん生き物たちが眠りから覚めていきます。色を失っていたお庭に、いろんな色がついていきます。その中の桃色の前にまーちゃんは立って、「今年はたくさん蕾がついてるね」

と言いました。私も隣で一緒にその木を見上げます。

epilogue

「今年は本当にたくさんの花が咲いてるね！」
まーちゃんはまた同じところに立って言いました。
「そうね。去年まであんまり咲かなかったのにね」
隣には、お父さんとお母さんがいます。お父さんはただ黙って木を見上げています。暫く、まーちゃんたちはそこに立って桃色を眺めていました。まーちゃんは悲しそうに微笑んでいます。お父さんは優しい顔で何かを考えています。お母さんは少し涙ぐんでいます。たくさんの桃色の花をつけた木を見て、私も暫く隣に並んで一緒に眺めていました。

そして、私は空へ駆け出しました。

私が木の周りを走ると、風が起きて桃色の花びらがひらひらと舞っていきます。まーちゃんたちの周りも走って、桃の花びらと優しい風で包み込みました。最初はみんな驚いていたけど、その次には優しく笑いました。みんな、私の大好きな笑顔でした。お庭で遊んでいたむぎくんもその様子を眺め、いつかのぶちの猫も少し離れたところからそれを眺めていました。ありがとう、一回私はそう呟いて、私もみんなの隣に並びました。周りをひらひらと花びらが舞っていきます。まーちゃんが手を伸ばすと、その手のひらの上に一枚の花びらが乗りました。暫くその桃色を眺めて、ふっ、と手のひらに息を吹きかけます。また風を受けた花びらは、またひらひらと舞っていきました。

木の根っこのほうには茶色と桃色とほんの少しの緑色で綺麗な絨毯ができていました。それは空の青色と白色とよく合っていました。まーちゃんは、花びらの行方を追って下を向き、絨毯に気づいてまた笑いました。そして、空を見上げて、
「ありがとう」
そう呟きました。その顔は、私の大好きな笑顔でした。私はすごく

嬉しくて、まーちゃんの足にぴたっと寄り添いました。それから、茶色と桃色と少しの緑色の絨毯の上で、桃の花びらがひらひらと舞う中、まーちゃんとお母さんとお父さんと私と、むぎくんと猫さんで、たくさんの花を咲かせる桃の木と、花びらの舞う青色の空を、ずっとずっと眺めていました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7709o/

momo

2010年11月7日21時45分発行